

大きく育ったクサギ



写真 1 満開の伊豆諸島ゾーンのクサギ

伊豆諸島ゾーンの園路沿いにクサギがあります。伊豆諸島由来の個体で、もしかするとシマクサギかも？と思って見守っていましたが、クサギでした！

2020 年頃は腰高ほどの細く小さな株でしたが、今は樹高 4m を超える立派な木になって、花をよく咲かせ、ベンチにいい感じの日陰を作ってくれています。今回はこの株をモデルに「クサギ」について掘り下げてみたいと思います。



～花は 24 時間営業！～

クサギはシソ科クサギ属の樹木です。シソ科というと左右相称の唇形花を思い浮かべますが、クサギの花は先端が 5 裂して平開した放射相称で、付け根側は細長い筒状になっています。

(写真 2) 花は横向きに咲き、4 本のおしべ (写真 3) と 1 本のめしべ (写真 4) が花筒から長く突き出ています。

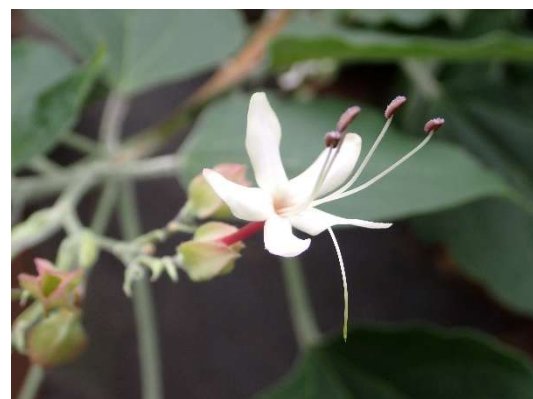


写真 2 クサギの花 (雄性期)



写真 3 おしべ (葯室と花粉)

この花の形状は、口吻の長い飛翔昆虫に蜜を吸わせることに役立ちます。日中、学習園ではこの花にクロアゲハやホシホウジャクが訪れ、羽ばたきながら細長い花筒に長い口吻を差し込み蜜を吸っています。その際にハネにおしべやめしべが触れ、送受粉が行われます。昼行性のチョウやスズメガだけでなく、夜行性のスズメガもクサギの重要な送粉者として知られています。

花には強い甘い香りがあります。この株が満開のとき、暖かい日には、風向きによっては情報館前に香りが漂ってくるほどです。香りを使うと、動物の視覚で認知できる範囲とは異なる空間にも開花を知らせることができます。

白い花は緑に覆われた山野でよく目立ちます。実際に、夏の樹木の花 (虫媒花) の多くは白色です。クサギは一つの花が 3 cm ほどあり、花序全体では 20 cm 以上の大きさになるので、開花中であることがヒトが遠目に見てもすぐにわかります。(写真 1) 白色の花は夜間にも目立ちます。形と香りと色を駆使して、一日中狙った動物を誘っているのです。



写真 4 めしべ (柱頭)

2026年8月15日



写真5 役目を終えて地面に落ちた花



写真6 萼に包まれた若い果実



写真7 熟した果実



写真8 毛で覆われた枝



写真9 別個体の枝

花筒の外側が赤色になっていることにも理由がありそうです。(写真5) ヒトの目線では単に華やかな印象を持ちますが、送粉者たちはヒトとは異なる色覚を持っているので、この花の本当の色は私たちには認識できていないと思われます。想像ですが、花筒の色を沈ませ、平開部に正面から来てもらう(送粉者に空振りをさせない)ための工夫なのかもしれません。

～ド派手なバイカラー！～

大きな萼の中には子房があり、花が脱落したあと萼の中を覗くと若い果実になっています。(写真6) この時点では萼は閉じていますが、果実が熟して青色になる9月頃には、赤色になって星形に開きます。(写真7) こちらも豊かな色覚を持つ“鳥”を誘って果実を食べてもらい、種子を遠くに運ばせるのです。目立たせた甲斐あってか、学習園で熟した果実はすぐになくなってしまい、見られる期間は短いです。

～誘う香りと忌避させる香り～

シソ科は、食害する動物を寄せ付けないために葉や茎に強い芳香を持つ種が多い植物群です。クサギもその一つで名前の由来は「くさい木」です。ヒトの香りの感受性には個人差がありますが、お客様に尋ねてみると「焦げくさい」と言われます。クサギは花と葉や枝で少なくとも2種類の香りを使い分けています。

～体を守る毛～

クサギの葉の両面や若枝には細かい毛が生えています。(写真8) 毛は物理的に体を食べられづらくする役目があります。クサギに限らず、こうした毛は幼木や新葉に特に多くなる傾向があります。冒頭で出したシマクサギ説は、この株が開花サイズになっても葉の表面が毛深かったためになりました。

※シマクサギは葉の表面に毛がない



時々、お客様から「このクサギは変わっている」と言われることがあります。よく観察してみると、ほかの株(写真9)と比べて葉の臭さが弱く、毛深く、若枝が太めで、樹形はこんもりとし…確かにこの株の個性を感じます。実際には、ヒトの五感では認識できない多様な個体差が植物にもあるということを想像させてくれます。クサギはヒトの生活圏にある植物です、みなさんも見つけた株の個性を探しを楽しんでみてください。